

## 傑出した入所者自治会長，逝く ——沖繩愛楽園，金城雅春さん聞き取り——

福岡安則\*・黒坂愛衣\*\*

2021年3月8日(月)，沖繩愛楽園交流会館学芸員の辻央さんから訃報が届いた。この日の朝，沖繩愛楽園入所者自治会長の金城雅春(きんじょう・まさはる)さんが亡くなられたというのだ。享年67。「金曜日まで自治会〔事務所〕に出でおられ，突然のことに呆然としています」。コロナ禍のため，通夜・告別式は園内の霊安棟で遺族，園幹部，自治会幹部のみの参加で行われるとのこと。「後日，偲ぶ会を開くことが考えられています」。

金城雅春さんへの追悼の念をこめて，2013.12.14～15と2日続きでさせていただいた聞き取りをまとめたい。(ただ，いつものライフストーリーの提示とは少々趣を変えて，この聞き取りを実施したときの調査旅行のフィールドノートの紹介から始めてみた。)

金城雅春は，沖繩で，ハンセン病に罹患した最後の世代の一人であるだけに，彼のライフストーリーは，1970年代以降の，本土とは事情を異にした沖繩のハンセン病問題のさまざまな側面を活写している。この時期，沖繩では在宅通院治療の営みが定着していたこと。確実に治る時代を迎えていたにもかかわらず，「らい予防法」による強制隔離政策の影響で，真の社会復帰は困難な状況に置かれ続けていたこと。

そして，入所者自治会長としての金城雅春の傑出したリーダーシップの発揮ぶりが語られるが，厭味がまったくない。国賠訴訟での闘いぶりもそうだし，『沖繩県ハンセン病証言集』づくりもそうだ。超高齢化してきた入所者たちの生活の場をセンターに集約化していくのだが，「集約化には集約化の仕方がある」という揺らぎのない発想には感心させられた。看取りも，病棟という孤独な場ではなく，日常的な暮らしの場であるセンター内の各自の自室でおこなうこと，そしてまた，認知症の人たちもけっして「閉じ込めない」で対応するという哲学を，彼は生きぬいた。ほんとうに惜しい人を亡くしたとの思いを拭えない。

なお，〔 〕は文意を明確にするために聞き手が補ったもの。「琉球政府立(けんりつ)」といった表記は，語り手は「けんりつ」と発音しているが，正確には「琉球政府立」と表記すべきであろうと判断したということを示す記述上の一つの工夫である。

キーワード：ハンセン病，隔離政策，らい予防法，ライフストーリー

\* ふくおか・やすのり，埼玉大学名誉教授，社会学，yfukuoka196869@gmail.com

\*\* くろさか・あい，東北学院大学准教授，社会学，kurosaka@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

本稿はJSPS科研費18K02003および19K02126の助成を受けた研究成果の一部である。文責は言うまでもなく筆者自身にある。

## フィールドノート（2013年師走）

**2013.12.13（金）。**羽田 10:35 発の JAL で那覇へ。今回の聞き取り調査のメンバーは、福岡安則、黒坂愛衣、そして埼玉大学教育学部学生の新井彩未と樋田真季。この2人の学生は、他学部聴講で福岡の授業を履修していた延長でこの調査に加わった。調査費用は、もちろん科研費である。

那覇空港からは 14:30 発の高速バスで名護へ。そして、タクシーで沖縄愛楽園へ。久しぶりの愛楽園訪問である。園に着いたのは 17:30 すぎ。福祉課で鍵を受け取り、「面会人宿泊所」へ。（園内に食堂「あい」があり、おいしい郷土料理が食べられることを教えられる。）この日の夕食は、名護のスーパーで買ったテビチなどのお惣菜で。

**2013.12.14（土）。**10 時前、自治会長の金城雅春氏が、ボランティアガイドの小松瑠美子さんを伴って、面会人宿泊所へ登場。小松さんは、埼玉大学名誉教授の清水寛先生の連絡先を知りたかった（だけな）のだが、聞き取り場面に同席となる（ちなみに、小松さんは金城会長と同一年であった）。

金城雅春は、1954 年 1 月 30 日生まれの 59 歳の若さだ！福岡の言うところの「セピア色の記憶」は、5 歳のとき、山津波で同じ集落の人たちがたくさん亡くなった。そして、彼の家族は石垣島へと移住、というもの。

那覇で通っていた高校生のとき、ハンセン病を発症。スキンクリニックで通院治療を受ける。大学卒業後、腎臓を悪くしたのに連動してハンセン病も再発。1980 年 5 月に愛楽園に入所。療養所暮らしが長引きそうというので、結婚してまもない妻と離婚。長年にわたり自治会活動に携わってこられた。

2 時間ほどの聞き取り終了後、小松さんの案内で、園内をまわる。「澄井（すむい）小中学校之碑」、「旧面会室」、墮胎児が埋められたという「東の浜」、「平安之苑・声なき子供たちの碑」、できたての、まだ開館前の「社会交流会館」、「青木恵哉頌徳碑」などで詳しい説明を聞く。戦時中の防空壕「早田壕」では、入口の防護柵の鍵を開けて中に入らせてもらった。

そのあと、「第一センター」へ。介護員の方にぼくらを引き合わせたところで、小松さんは大学へ（学芸員の資格を取ろうとしている）。「第一センター」は、金城会長ご自慢の施設で、ユニット方式が採られている。たしか「ユニット 1」が車椅子や寝たきりの人たち、「ユニット 2」が認知症の人たち、「ユニット 3」が男性の単身者たちで、盲人 1 人も含まれていて、「ユニット 4」が女性の盲人ほか。ぼくらの見るかぎり「風通しのいい、文句のない施設」に見えた。

宿泊所に戻って、2 時すぎの遅い、レトルトの昼食。一休憩のあと、もういちど、ぼくらだけで園内散策。「スコアブランド公園」の丘の上の「希望と自信の鐘」（鐘自体は丘の下におろされていた）を見たあと、津波への対処のために造られた「避難スロープ」を伝って行ったら、浜に出てしまう。浜辺づたいに、青木恵哉らが上陸したという大堂原（ウフドウバル）の大口浜（ウフグチハマ）へ。「壺区」のあたりに「御歌碑」が見当たらず、空き地にブルーシートにくるまれて横倒しになっているのをみつける。職員住宅の壁の「被弾跡」、「水タンク被弾跡」を見る。「三上森の碑」も見つける。かつては、ここに森があった、「無菌地帯」と「有菌地帯」を分けていたのだという。

夕食は、食堂「あい」で。沖縄の家庭料理というかんじで美味。

**2013.12.15 (日)**。9:30、金城会長の案内で、「住吉区」の平山壮一氏（歌人としての雅号。本名の公表は差し控えてほしいと<sup>1</sup>。昭和 11 年生、与那国島出身、77 歳）の聞き取り。昭和 26 年、愛楽園入所。所内結婚したつれあいのあいだに、娘（昭和 46 年生）、息子（昭和 51 年生）をもつ。妻が妊娠したとき、あわや「墮胎」されそうになったのを、看護婦と喧嘩して、取り戻した。1971 年でも、そのような非道な対応だったのだ！ 子どものいない兄夫婦が育ててくれる約束をしていたから命を救えたという。

13:00 から 50 分ほど、宿泊所で、金城会長の追加聞き取り。1972 年の本土復帰に際しては、本土復帰特別措置法で、琉球政府下の在宅通院治療や後保護といった措置は継続されるようになったこと、それは犀川一夫先生の尽力によるものであること、国賠訴訟では、最初は自分だけが名前を出すかたちで、第 7 次原告以降、次々と仲間を募ったこと、当時の自治会が訴訟には非協力的で、原告・弁護士に便宜を計らわないので、もう一度自分が「自治会長」になったこと、裁判では 1972 年の本土復帰前までは日本政府の責任ではないということで、沖縄の原告の賠償金は一律 800 万円に減額されたが、「ハンセン病補償法」により沖縄も本土と同額になったこと、「第一センター」を造るときには、他のハンセン病療養所ではなく、沖縄県内の民間施設を見てまわって、それよりもいい施設をと考えたとのこと。この日も、遅い昼食。

**2013.12.16 (月)**。朝 9 時に、退所者の OS さん（68 歳）が個人タクシーで迎えにきてくださる。読谷村（よみたんそん）の、集団自決が起きた「ちびちりがま」を案内してくれたうえ、退所者の大浜幸二氏（仮名、1941 年生）宅に連れていってくださる。大浜氏聞き取り。大浜氏の「セピア色の記憶」は、4 歳の誕生日を目前にした 1945 年 4 月、隠れていたガマから出て、黒人米兵の唇の赤い色とチーズの黄色い色に恐怖した、というもの。小 6 で発症。園内の澄井中学校を卒業。公立の高校を受験するが、試験監督の先生が自分の答案を触ることを忌避するという差別を体験する。仕方なく、私立の高校に行く。大学も出るが、再発。耐性菌の治療に苦しむ。1999 年発行の沖縄楓の友の会編『ハンセン病回復者手記』の制作責任者は、彼だという。当時、退所者として先輩である KC さん<sup>2</sup>や平良仁雄（たいら・じんゆう）さんたちにやってくれと言われて、先輩

<sup>1</sup> 2013 年の時点では、本名は出さないでほしいとおっしゃっていたこの御仁、2019 年に『平得壯市 俳句・短歌集 飛んで行きたや——沖縄愛楽園より』（コールサック社）を上梓されるにあたり、実名出版をされた。ひとは変わる、ということをもって示された。

<sup>2</sup> ながらく「沖縄楓の友の会」の会長をつとめられた KC さんには、わたしたちはずいぶん懇意にさせていただき、そういう場面ではつねに本名を名乗られていたが、沖縄愛楽園交流会館学芸員の鈴木陽子さんによれば、公の場面では本名は秘匿されてきたとのこと。なお、『ハンセン病回復者手記』では「島川漱治」の仮名で語りを載せている。ただし、その語りのエンドの部分は、彼が退所後、ある会社に勤め、社長に気に入られて、その家のお嬢様とゴールイン、めでたし、めでたし、という展開になっている。KC さんに、「えっ、社長の娘さんと結婚したの？」とお聞きしたら、「そんなわけないじゃないか。これは、この冊子をまとめた人が書き直してしまったんだ

をさしおいて「沖縄楓の友の会」の会長をした。『手記』の編集を担当した牧師が手記をいじったので、「それはダメだ」と強く言った。だから、KCさんのもの以外は、本人が書いた原稿のままのはず、と。自分の手記も「大浜幸二」の仮名で載っている（「拒否された進路」200-202頁）。また、大浜さんは、澄井小中学校の卒業生の同窓会「ひるぎの会」の会長をしたことも。私たちが訪ねた前日も、その忘年会で、沖縄各地から10名ほど集まったとのこと。

お昼は、大浜さんに「むら咲きむら」の食堂で御馳走になる。2つの大きなリゾートホテルや残波岬（さんばみさき）にも連れていってくださる。そのあと、OSさんの個人タクシーで、宜野湾市の、「普天間基地」がみえる嘉数高台公園に連れていってもらふ。沖縄戦の戦死者の慰霊塔である「青丘之塔」「京都之塔」「嘉数之塔」を見る。夕方5時には、今日の宿「沖縄ぎのわんセミナーハウス」へ。6時から、比嘉朝雄（仮名）さんと夕食。両親がハンセン病患者で沖縄愛楽園に収容されていたという。そのような状況を背景に、朝雄さんは昭和28年に生まれている！これはすごいことだ。途中からおつれあいと長女（21歳、沖縄看護大学学生）も同席。

**2013.12.17（火）。**朝9:30、比嘉朝雄さんが車で迎えに。ご自宅で母親（昭和7年生、石垣島出身、81歳）に聞き取りを試みるも、認知症がきつく、ちょっと無理であった。そのあと朝雄さんから聞き取り。しかし、彼はまだ「語ることへの心の準備」ができておらず、聞き取りは不首尾に終わる<sup>3</sup>。

強い雨風のなか、那覇の「ホテルパームロイヤルNAHA」まで送ってもらう。夕食は、国際通りから路地に入ったところの「ゆうなんぎい」で。

**2013.12.18（水）。**樋田さんが疲れたというのと、天気具合を考えて、南部戦跡の見学は取り止め。黒坂さんはホテルで原稿書き。ぼくと新井さん、樋田さんは「国際通り」をブラブラ。お昼は4人で「ゆうなんぎい」で。午後は3人で「首里城」へ。

19:55発のJALで、羽田へ。東京は、雪にこそならなかったが冬の寒さ。沖縄は、滞在中、最高気温21度から24度だった。ただし、カラッと晴れることはなかった。

今回の5泊6日の調査旅行で、首尾・不首尾は別として、療養所入所者2名、退所者2名、家族1名、計5名の方からの聞き取りをおこなった。これが、ぼくらの調査のいつものペースだ。

---

よ」と。KCさんの手記を勝手に書き換えてしまった「編集者」には、正直、腹が立った。1人の手記でも脚色してしまったら、『手記』全体の信憑性が失われることになりかねない。

<sup>3</sup> ご母堂の聞き取りは、遅きに失した。息子の聞き取りは、期が熟していなかった。彼からの聞き取りが成就したのは、2018.6.22、厚労省での「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典で遺族代表として挨拶の辞を述べた後、東京での聞き取りにおいてであった。『世界』2018年11月号の「ハンセン病回復者の語り・家族の語り 連載第3回」を見られたい。

## ライフストーリー聞き取り（2013.12.14-15）

### 山津波に遭って石垣島へ移住

わたしは1954年1月30日生まれ。59歳。生まれたのは、沖縄〔本島〕の大宜味村（おおぎみそん）。

わたしがそこにいたのは幼稚園までで、育ちは石垣島なんですよ。石垣に引っ越した理由が、台風で山崩れ、山津波があったんだね。たくさんの方が亡くなってる。公民館に、元気な人も亡くなった人も一緒におったっていう強烈な記憶があります。家族は大丈夫でしたけども、隣近所の人たちがやられてしまった。大雨ですね。ちょうど裏山が、地下水が湧き出る場所だった。それで、ドサッと崩れてしまって。うちの屋敷も半壊。それがあって〔石垣島に〕引っ越したってわけです。

### 姉2人が戦争マラリアで死亡

うちは〔もともとは〕きょうだい8名。ただ、女がいちばん上と3番目にいたんですけど、戦争のときに亡くなってる。実質は、ですから、6人きょうだい。わたしはその5番目。わたしまでみんな男で、いちばん下に女がいます。

〔姉たちは〕戦時中に亡くなってる。戦争マラリアですね。戦争で山に避難してて、蚊に喰われてやられてる。愛楽園でも、戦時中にマラリアで亡くなってる人、けっこういますね。防空壕〔に隠れてて〕。

わたしは〔この2人の姉のことはまったく〕知りません。沖縄の場合、戦争で戸籍がみんな焼失して、戦後作り直してる。そのとき〔すでに〕亡くなったから、〔姉たちは〕戸籍から外されてた。家の仏壇の位牌に〔姉たちの〕名前はあるんですけど。——あとからまた、〔戸籍にも〕ないとちょっとまずいよ、ということで、親が生きてるうちに復活はさせたんですけどね。

### 移住する民／パイナップル栽培の貧しい農家

〔石垣島には〕親父の弟が先に行っていました。〔それは台風とは〕無関係に。土地を求めて行った。移民ですね。南の離れ島へ。行ったところは、親戚がたくさん行ってたところ。同じところからたくさん集団で移民してた。みんな知り合いです。

そのあと、小学校3年のとき、〔石垣島の西部の〕崎枝（さきえだ）というところに叔父さんたちと一緒に移ったんですけどね。畑の関係で。そこは、周りみんな宮古の人たちでした。

〔石垣島での暮らしは〕農家。貧乏な農家です。パイナップル〔の栽培〕がメイン。〔小さいときから〕ずっと手伝い。夏休みなんか、パインの収穫。植え付け。

〔それでも〕小学校のときは、けっこう遊びまわってますね。同年代のイトコたちがいるから、一緒に遊んでました。田舎ですから、山へ行って、木を倒して、自分たちで何かをつくるとかね。鳥を落とすためのパチンコを作ったり、鳥籠を作ったりして。メジロを捕まえてきて、飼うとかですね。

〔学校での〕嫌な思い出って、あんまりないですね。先生とも親しかったし。中学へ行くと、小さい頃から知ってた人が先生になっていたりとかですね。だからもう、先生という感覚で付き合ってたな。友達なんですよ。家にも



遊びに来るし。中学にオートバイで通学しても〔先生は〕黙認。〔学校までは〕4キロぐらいだったかな。〔うちに〕自転車がなく、オートバイがたまたま兄貴のあったから。みんなは、自転車とか歩きとか、そんなもんですね。

〔パイナップルの収穫は〕夏場ですね。缶詰用のパイナップルの路地栽培でした。夏場になると、家族だけで一日10トン出してました。朝早くから夜暗くなるまで、ずっと。お昼も、ちゃっちゃ食べたら、30分ぐらいですぐ仕事に入る。もう、やらんといけないんです。食っていけない。

## 高2で発病、在宅治療

高校は、那覇です。琉球政府立（けんりつ）の〔沖縄〕水産高校を出てます。わたしが専攻したのは無線通信科。トントンツのやつ。〔その高校は〕わたしが勝手に〔決めた〕。兄貴たちの行ったところに行きたくないちゅう〔考え〕。比較されるのが嫌だから。〔男で〕いちばん末っ子だから、小さい頃から兄たちみんなと比較されて、「おまえは」って言われたからね。まあ、電気が好き、機械好きだったんで。

〔那覇では〕叔母のうちに下宿。もう小さい頃から、わたしが入り浸ってたおうちだったんで、〔その叔母は〕第二の母みたいな人。〔じつは〕わたしは〔その家に〕養子に行かされることになっていた。〔その家は〕お姉ちゃん2人はいたんですけど、男がいない、つって。結局、行きはしなかったんですけど。

〔ハンセン病が発症したのは〕高校2年のときですね。高校生、やんちゃですから、酒飲みますね、友達と。飲みだしたら、湿疹が出た。アレルギーと思ったんですよ。それで皮膚科へ行ったら、「保健所へ行きなさい」と。保健所へ行ったら、また、那覇の古波蔵（こはぐら）のスキンクリニックを紹介された。

〔ハンセン病の〕外来治療をやっているところですね。スキンクリニックへ行ったら、「ハンセン病だ」ということですね。それで在宅治療をしてたんですけどね。

〔わたし、そのとき、ハンセン病に関する知識〕ゼロ。〔べつに、世の中、真っ暗に〕ならなかったですね。あ、そう、つて。スキンクリニックは、単なる皮膚科だと思ってたぐらいのもんで。

〔当時、ほかの患者さんとは〕会いませんでした。ほかの人を見たことないです、そこでは。なんか〔患者同士が〕会わないように、スケジュールを組んでいたみたいです。

飲んだのはDDS。〔まだ多剤併用は〕始まってなかったですね。〔わたしの病気は〕DDSで治まりましたよ。治まったから〔治療を〕やめたんですけどね。ちょうど、本土の大学に行ったから。

〔親にはハンセン病のことはなにも言いませんでした。〕重大だと思ってないから、本人が。べつに相談することでもないだろうなと思って。叔母さんにも、誰にも言っていないですね。熱発（ねっぱつ）するとか、寝込むような状況じゃなかったしね。ごく軽くて。

〔本土の大学へ行くことは、スキンクリニックの医者に〕言った。〔そしたら〕「うん、いいよ」つて。べつに、外見上なにもないんですからね。——いまでは、ありますよ。〔指が〕ちょっと変形してます。

## パスポートをもって東京へ、苦学の4年間

大学は、たいした大学じゃないから〔大学名は〕いいですよ。東京〔の私立大学へ行きました〕。親が「遊ぶ金は出さんけど、学費はちゃんと出す」っていう約束で行った。ただ、〔わたしが大学へ行って〕すぐ、親父が亡くなっちゃったんでね。アルバイトもしたんですが、〔学費が続かず〕結局は中退した。そのあと、アルバイトしながら専門学校へ行っただけです。

〔大学へ行くときは〕パスポートを持って行きましたよ。〔のちに〕夏休みに〔沖縄に〕帰るときは、パスポートは要らなかった。昭和47年。1972年。〔沖縄〕返還ですね。

〔沖縄返還問題には〕関心ありましたよ。高校のときに、復帰運動のデモ行進に参加してました。〔先生たちも〕一緒でした。みんなで〔那覇の〕国際通りを〔デモして〕歩いてた。ちょうど、沖縄の世（ゆ）変わりでですね。

〔米軍基地が沖縄にいっぱいあるのは〕おかしいという感覚は、べつになかったけどね。生まれたときからずっと〔米軍基地は〕あるじゃないですか。大宜味村の半島のところにも、奥間ビーチってあって、そこが米軍のVOA (Voice of America) の放送局で、幼稚園のときは、遠足、そこへ行ってたからね。まわりにアメリカの兵隊が行軍してるでしょ。そういうのを見てるし。「ギブミー、チョコレート」じゃないけど（笑）。もらいましたよ。

B円という軍票のお金を、小遣いにもらって、飴玉を買いにお店に行く途中で、田んぼのなかに風に飛ばされて、探しきれなかったの、鮮明に覚えている。5センチ角ぐらいの紙ですから、風で飛んでしまう。幼稚園のときですね。

〔東京へ行く前〕沖縄じゃ、ドルでしょう。高校のときは、50セントか1ドル持って、日曜日一日中遊びまわって、映画観て、ご飯食べてとかって、やってた。〔ところが、本土に行ったら〕ぜんぜん感覚が違う。1ドルが360円の時代ですから、〔ドルを円に〕両替したら、かなりの枚数になるじゃないですか。金持ち〔の気分〕になって……。〔実際に物を買ったら、たいして〕買えない。〔円は〕値打ちないなあと（笑）。

食べ物は、口に入りませんでした。みんな、甘くて。卵焼きも砂糖が入ってるし。沖縄は、卵焼きは、砂糖じゃなくて、塩を入れる。あと、納豆がダメ。食べ物が、あわない。蕎麦も違うなって（笑）。——〔結局〕自炊ですね。外食すると、金が足りないから。自分で適当に食べる。

アルバイトは、いろいろ。バーテンとか。土方ももちろんやった。あと、ガードマンですね。まあ、ビル管理がいちばん楽だったかな。座ってればいいから。〔そこそこ稼げました。〕遊ばなければなんとか生活はできるというレベルですね。酒は、飲みましたよ。他人（ひと）の金でね。「自分で飲む金、おまえ、ないだろ」って言われて、「ハイ」つって。素直に「ありがとうございます」つって言って。

〔通った専門学校は〕無線通信の技術者〔の養成〕ですね。高校のときはオペレーターなんですよ。叩くほう。〔専門学校では〕機械のメンテナンス。〔2年間で卒業しました。〕

#### 再発と腎臓病、沖縄愛楽園へ入院

〔専門学校で修得した資格を活かすかたちでの就職は〕できなかった。電気工事屋さんしか〔勤め先が〕なかった。沖縄って、仕事がないですよ。

〔石垣に帰ったのは〕妹が高校卒業で本土に行くつちゅうことで、おふくろ

が一人になると。〔それで〕交替。「おまえ、まだ仕事してないから、おまえ帰れ」って〔兄たちに〕言われて。〔兄たちは〕もう、みんな、家を離れていた。長兄（ちょうなん）は結婚して、西表島（いりおもて）だったね。〔親の〕面倒をみるよりも、まず〔自分たちが〕生きていくほうが〔先だからね〕。〔いまは、長兄が〕定年〔退職〕になって、〔母のことを〕みてるけど。〔母親は〕元気です。

〔いま〕97か8。おふくろのお母さんも百歳の手前で亡くなられた。母親の家系は長生きだな。親父の家系も長いか。親父は早死にしたけど、いちばん上のお姉さんは百歳超えてまだ生きてるもの。

〔石垣に戻って勤めたのは〕電気工事屋さん。〔従業員は〕30～40名ぐらいいたのかな。〔ハンセン病の〕再発は、ここの電気屋さんで仕事してて。本土から友達が新婚旅行で来て。1週間ぐらいドンチャン騒ぎして。明日帰るからっていう晩、遅くまで飲んで。たら、翌日、熱発して、動けなくなってしまっ。県立八重山病院へ行ったら、「よくわかんない」ということで、1週間ぐらい入院したのかな、熱がおさまるまで。〔そのとき〕24か5〔歳〕だったと思う。

いろいろ調べていたら、リンパ節が腫れてるということで、悪性リンパ腫の疑いで、検体をがんセンターに送ったら、「なんともない」って。で、太股の皮膚に病変が出た。ちょっと皮膚が盛り上がってきたんですね、1カ所。「先生、これ？」って見せた。内科の先生でしたけども、ハンセン病をよく知らなかったんですね。「〔いちおう〕採ってみよう」ってことで、県立中部病院へ検体を送ったら、ハンセン菌がいるっていう連絡が電話で来たみたい。

八重山病院の先生からわたしの職場に電話が来て、「仕事終わってでいいから、来てくれないか」ちゅうから、何事かなと思って行ったら、「うーん、病気みたいだ」ということで、保健所に連れていかれて。保健所がまたね、担当の保健婦が知ってる友達だった。「なんで、あんた、こっちへ来たの？」って。「先生が行こうちゅうから来たさ」って。それでまた、薬を飲みだしたんですけどね。

仕事をしながら外来治療でやってたんですが、1月（ひとつき）にっぺんとか2カ月にっぺん熱発するんですよ。そのたんびに入院。〔「専門の」〕病院があるから行くか」って先生が言うから、「〔治るまでに〕どのぐらいかかりますか？」「3カ月かな」。3カ月ならいいかなと思って、仕事を休んで〔愛楽園に〕来たんですよ。3カ月が、いままでになってるんですけどね（笑）。〔入院したのが〕1980年の5月25日だったかな。〔26歳でした。〕

〔わたしが愛楽園に入所するまで、職場の人は誰もわたしがハンセン病だっことを〕知らないです。〔最初のうちは〕病院を抜け出して仕事現場に行ってたからね、指示を出しに。〔自分自身〕普通の熱発だと思っってないし。ちょうどそのときに熱発で腎臓を悪くして、血尿とか出たから、結局、腎臓が悪いということしか〔まわりには〕言っってない。ハンセン病で熱発してるって、わたし自身が思っっていないですよ。

〔病状が進んで〕外の現場へ出られなくなってからは、〔勤め先を〕設計事務所に移った。〔仕事は〕電気の設備設計。〔事務所を〕休んだって、仕事は病院に来る。〔職場の人はわたしが〕ハンセン病とは知らないですよ。

〔わたし自身がハンセン病の再発だと知ったのは〕医者から言われて、保健婦のところへ連れて行かれたときですよ。病名が付いたとき。あつ、そういえば、おれ、高校のとき〔ハンセン病を〕やってたなあと。



〔愛楽園への入所は1980年ですから、自宅が消毒されるとか〕そういうことは、もう、全然ないです。それはないですね。

### 妻とは離婚、肩の荷がおりた

〔その時点でわたしは〕結婚してました。〔結婚したのは〕25だったと思う。結婚して、じきに来たんですよ、こっちへ。

〔結婚相手は、石垣島出身の同年代の女性。〕中学校はわたしと違うんですけど、友達〔のつながり〕で知り合った。

〔わたしが愛楽園に〕来るときは一緒に付いてきてくれた。彼女は、〔この〕病気自体のことを、よく知らなかったんじゃないの。わたしも知らんから、あんまり細かい話はしとらんし。

〔ここに来たときは、自分たちで〕那覇空港まで来て、空港からここまでは県の担当者が車で送ってくれた。普通の、県の車、乗用車です。

うちの母親は、愛楽園ができる前の〔昭和7年の〕嵐山事件、そのときが青年時代なんですよ。その反対の運動に参加してるんですね。だから、警察に逮捕されたひとたちにおにぎりを差し入れに行っただけで話してくれたんだけど。「なんで、あんたがそれに罹らんといかのか」と。

うちの長兄（ちょうなん）も、北部農林高校って〔愛楽園のある〕名護の高校〔卒〕なんですね。で、愛楽園（ここ）に薪（まき）を売りに来たって、高校時代に。アルバイトで。「べつに、心配することないよ。あっちのひと、みんな、やさしいから。行って、治してこい」って言われた。

〔妻とは〕別れました。〔わたしが愛楽園に入所して〕2年目ぐらいかな。もう、一人で置いとってもしょうないなあと思って。わたしが帰れる状況ではなかったんで。〔わたしの入所の際に〕石垣島から那覇には呼んだんですよ。〔それで〕兄貴たちには〔つれあいのことは〕お願いはしてたんだけど。わたしが頻繁に〔会いに〕行けるわけじゃない。知らんところに一人で置いとくっていうのも酷（あれ）だなあと思って。「もう、あんたの好きにしなよ」つって、別れました。別れて、わたしは楽になったけど。肩の荷が下りた気がした。

〔当時の園長は〕犀川〔一夫〕です。副園長の斉藤先生という方がいて、その先生が石垣に通って来ていて、わたしの外来での主治医でした。

〔わたしは、入院後〕基本科病棟で3年ほど過ごしました。〔わたしの場合〕腎臓が悪くて、いろんな〔ハンセン病治療〕薬が使えなくて。腎臓の状態を診ながらしか〔薬を〕採用できないから、結局、強い薬が使えない。飲んで、薬疹を起こしたんですよ、最初。〔それで、なかなか〕病気が治らなかった。

わたしは、ほとんどもう、B663ですね。〔あれを飲むと、からだが真っ黒に〕なりました。みんな、そう言っていましたね。「これ〔を飲むと〕皮膚が黒くなるよ」って。「黒くなって家に帰ると、あんた、何してるんか！病気を治しに行っただけじゃないのか」って。「暇だから、毎日、釣りに行ってる」って〔答える〕（笑）。あと、サリドマイド。熱瘤（ねっこぶ）に効くちゅうやつ。その2種類だけです、使ったの。DDSは使わなかった。

〔当時はまだ、わたしはここから〕出てくんだ、と思ってましたよ。出て行くこうと思って、いろいろ準備してた。〔しかし、ハンセン病は治っても〕腎臓は治らない。

### 後遺症の重い人たちに会ったショック

〔わたしが愛楽園に入ったときは、普通に〕本名そのまま〔で入りました〕。〔もう〕強制収容じゃないですよ。そういう時代じゃないです。入院する、という感覚ですよ。ふつうの一般の病院に来た感覚。

驚き〔はありました〕。一緒の部屋におじいちゃんがいて。指がみんなないんですよ。こうして〔両の掌で湯呑を〕持って飲んでた。これ見たとき、“えっ。おれも将来、こうなるのかな”と思ったりして、一時（いつか）食事がすまなかつたんだ。ショックで。病棟は、食堂で食べたんですね、みんな一緒に。そういう人がいるじゃないですか。顔がちょっと変形したとか。

それはまだ、全療協〔本部のある東京の多磨全生園〕へ行ってみるとは、レベルが違った。ここのは、たいしたことないなと思ったんだけど。多磨へ行ったとき、“なんだ、こいつら。人間の顔じゃない”と思った。失礼ですけど。そういうショックはありましたね。

愛楽園（ここ）へ来るまで、自分が在宅で外来治療に通ってるときは、そういう人をぜんぜん見てないじゃないですか。在宅の人は、ほとんど、そういう障害が外部からわかんない人たちなんですね。療養所（こっち）へ来て、そういうのははじめて見て、かなりショックでしたね。

〔沖縄での病名ですか？ 法律が〕「ハンセン氏病予防法」だったから、いまでも、みんな「ハンセン氏病」と言いますね。

### 東京の全療協本部に3年

わたしは、東京の多磨〔全生園〕の全患協〔本部〕の事務局に3年、行ってきました。昭和60年から3年間ですね。〔当時の会長は大島青松園の〕曾我野〔一美〕です。〔事務局長が長島愛生園の〕高瀬〔重二郎〕。

〔わたしが〕透析を始めたのは、全生園（そこ）へ行った2年目からですよ。「風邪引いて熱発するなよ」と〔医者から〕言われてたんだけど。風邪を引いて熱発して、ガタッと〔腎〕機能が落ちて。最初は週1とか週2とかでやってた。いまは週に3回、4時間ずつ。月水金。一生お付き合いです。〔社会復帰を断念したのは〕やっぱり、透析をやりだしてからでしょうね。それまでは出る気でいた。いつでも食いつぱぐれはないような資格は持ってたから。

〔わたしが全患協の中央委員で東京へ行くことになったいきさつ？〕うちの支部長が、鹿児島〔の星塚敬愛園〕での支部長会議で「沖縄から出す」ということを約束してしまっただけで、ちょうど、わたし〔そのとき、愛楽園自治会の〕副会長してたんで。まさか会長を行かすわけにいかんだろうってことですね。

〔入所して間もないのに、なんでわたしが自治会の副会長をしたのか、だって？〕わたし、物好きだから。入ってきてすぐ、ここの状況を知りたくなったんですよ。〔それには〕自治会がいちばん勉強になると言われたから、じゃ、自治会に入れてくれ、と。〔自分から「入れてくれ」と言う人は〕いないんじゃないの。わたしぐらいで。

要は、〔ここに入ってきたら〕元気な人たちがたくさんいるじゃないですか。あの頃は600名ぐらいいいたかな。青年たちもたくさんいる。なんで〔みんな、ここで〕ゴロゴロしてるんかな。この病気はすぐ治るって言ったのに。治っても、なにかあるんかなあと思って。——自治会へ入って、はじめて、「らい予防法」という法律があるということがわかって、そこから勉強しだした。足を

突っ込んだら、若いから、「おまえ、これやれ」「おまえ、これやれ」ということで副会長まで上がってしまっただけ。

〔当時、全患協で取り組んでいた問題は〕予防法の問題ですよ。廃止じゃなくて、予防法の改正運動。あの頃は、それを運動の中心にやってた。職員を増やせとかそういう処遇〔改善〕、作業返還というのはもう終わってたね。〔支部長会議で全国の療養所を回って〕行ってないのは、大島〔青松園〕だけ。

曾我野さんとは、飲みながら、食べながら、よく話をしましたよ。いろいろ教えてもらいました。〔曾我野さんは〕豪快でしたねえ。飲みにしても遊びにしても。仕事にしても。しゃべりが達者じゃないですか、立て板に水で。そこはすごいなあと思って。神（こう）〔美知宏〕もそうだけど、大島〔青松園〕の連中、すごいなあ、と。二人ともお喋りで、よお喋るなあと思って。そこらへんは学びたいとこでしたね。なかなか真似できないけども。

あの頃は〔全患協は、全国の支部が〕だいたい〔足並み〕揃ってたね。〔その後、「らい予防法」の〕廃止の運動が出たときは、ちょっと、瀬戸内〔3園〕は別でしたね。「なんで、いまさら廃止するんだ。廃止すると、われわれの生活が保障されなくなるんじゃないか」「根拠法がなくなってしまうんじゃないか」と最後まで言ってた。そこらへんが、いちばんトラブルかなあ。ほかはもう、「廃止してもいいだろう。どうせ〔療養所が〕なくなるわけねえよ」。国の責任でちゃんと最後まで見てもらおうという気でいたからね。長島〔愛生園の自治会〕がいちばん、廃止に反対。強硬でしたね。〔やっぱり、光田健輔の影響が残っていたんだ〕と思います。あっちでは、光田健輔の悪口を言えないもの。〔愛生園では、光田健輔をめぐる評価が〕真っ二つですよ。〔だから〕人を見て〔ものを〕言わないと。崇拜してるやつがいるから。

愛楽園でも、戦争当時の園長〔の評価〕なんか、完全に二分ですよ。戦争中、元気な入所者（ひと）たちは作業とかいろんなのできるから〔処遇面で〕優遇されたんだけど、高齢とか体の不自由な人たちはそういう働きもないから冷遇されてたということで、評価がまったく〔分かれる〕。

〔全患協本部から戻ってきた後は〕途中休んだりしてますけど、平成に入ってから、ほとんど〔自治会長をやってたね〕。何年か、他（よそ）の人がやったぐらいで。ここは〔会員による直接の〕会長選挙で、立候補制です。〔会長をしてなかったときは〕立候補しなかったということですよ。「あんた、やれ。わたし、休む」ちって（笑）。また、そのうち休みますよ。ずっとはやっておれない。だから、途中で休むんですよ。

〔自治会役員では〕わたしがいちばん若いですよ。あと、60代の連中と70代前半の人たちでやってる。うちはね、年取るとやらないんですよ。引退して、出てこなくなるから。

〔沖縄愛楽園の入所者が本土の療養所に比べて若い人が多いのは、沖縄は発病する人が遅くまで〕あったということです。療養所ができるのが、本土より30年ほど後れてる。それもあるし、濃厚地域であるということもあったと思うんですけどね。結局、北のほうの本土よりは、どうしても遅くまで、感染者がいたということです。いまはもう、新発症患者がいなくなってるけど。

沖縄戦（せんそう）〔の影響〕はあると思います、大いに。それで蔓延したぶんもあるだろうし。みんな栄養失調でね。

## 国賠訴訟に第7次原告として立つ

〔1998年に、星塚敬愛園と菊池恵楓園の入所者13人が熊本地裁に「らい予防法違憲国賠訴訟」を提訴。〕わたしは第7次提訴のときに参加したんです。1999年12月。まあ、沖縄では早いほうですね。判決が出ないうちだし、〔勝てるという〕見込みもなかったときです。ただ、あの13人が〔裁判を〕やって、そこで判決（けつろん）が出ると、ほかの人みんなも絶対影響を受けるというのはわかってますよね。そういうことだったら、一緒に参加してやったほうがいいっていうのが、わたしの考えでした。

〔大島青松園の〕曾我野さんはもう提訴してて、電話でやりとりしてました。〔曾我野さんが全国の原告団の〕団長にはまだなってないとき。もうちょっと後ですね。わたしが愛楽園の原告団長になってから、〔各地の原告団の〕団長の会議をして、〔全国の原告団の団長を〕決めたから。

ここは、全国13園のなかでいちばん多いんですよ、原告になった人が。立て続けに、7次以降、8次、9次、〔園内の〕公会堂にみんなを集めて説明会をやったら、ダーッと手続きした。

わたしは、そのときは〔自治会の〕会長じゃない。ちょっと休んでる時期だった。翌年の10月には、〔また〕会長になってます。ちょっと自治会が協力的じゃなかったんで、こいつはダメだ、〔会長のポストは〕原告で握らんといかんということですね。

それまで園〔当局〕の意向で、〔国を相手の裁判をやる者には〕建物を使わさんとか、弁護士を〔面会人宿泊所に〕泊まらさんとかっていうのがいろいろあって。「おかしいんじゃないのか。われわれの代理人を泊まらさんとは何事だ」ということで、わたし、使用申請を出したら、呼び出されて、園の幹部みんなに取り囲まれて。いちおう論争（けんか）したですけどね。厚労省の庁舎管理規程というのがあるんですよ。あれは〔労働〕組合対策で作った規則（ほうりつ）なんですね。「それを、なんで、われわれ入所者に適用するんだ。おかしいだろう！」ということで、園長とか事務部長とかとやりあったの。わたしが会長になったあとは、施設側もなんも言わなくなった。自治会がするんだったら、ということで、もう、自由にこっちが使えるようになった。

〔琉大の森川恭剛先生が模擬裁判をやったのは〕うちらが提訴する前ですね。愛楽園の公会堂でやった。その前から弁護士たちが来て、説明してたの。こういう裁判が九州で始まったって。何度かやったんだけど、2、3名しか聞きに来なくて。ちょっと反応がにぶいなあということで、森川さんとゼミの学生たちが来て、十何名かで模擬裁判〔をやってくれた〕。そのときに、弁護士も15、6名、一緒に来て。模擬裁判の後で、弁護士たちが説明をして。〔模擬裁判はインパクトがありました。〕入所者って、裁判とは縁のない人たちですので、そういうことで中身がわかった。その日の夜には、面会人宿泊所（ここ）とか〔各人の〕部屋で提訴手続きをやって。17名ですかね、最初〔の第7次提訴のときが〕。

〔最初は、みんな名前を〕伏せてました。わたし一人、公にして、顔も出して。提訴の日の夕刊に、わたしはインタビュー記事を書けるということで、地元の新聞、〔沖縄タイムス〕と〔琉球新報〕の2つに顔写真付きで出たんですよ。〔誰かが〕顔を出さんといかん、ということで。〔ですから〕最初のうちは〔お互いに誰が原告になったかも〕わからない。〔しかし〕それは、ちょっ

といかんなあということで、参加した人、何名か知ってたんで、集まってもらって。本土みたいなことになったら、園〔の中の間関係〕自体がおかしくなるから、それはやめよう、と。みんな、公にしよう、と。〔次回からは〕公会堂にみんな集めて説明会をやって、その場で手続きをした。だから、誰が原告になってるか、みんなわかる。そういう方式を取ったんです、ここは。そこらへんも、ちょっと、本土〔の療養所〕とは違います。こっちはもう、オープンにしろ、ということで〔やった〕。

〔2001年の熊本地裁の〕判決では、沖縄は一律800万〔の賠償金〕ということで、最低限の金額しか出ないことになった。復帰以前の琉球政府時代のことは、知らんと。72年以降の分しか〔補償しない〕ということで、期間が短いから800万。〔しかし、沖縄で強制隔離を始めたのは〕日本政府です。で、米軍統治下になって、琉球政府になっていくという、そういう関係。〔裁判官は〕そこらが見えてない。

〔判決の後、ハンセン病〕補償法で、本土と同じように、800万から1400万になりましたけどね。

#### 『沖縄県ハンセン病証言集』づくり

『沖縄県ハンセン病証言集』（2007年）づくりは、わたしが言い出した。

〔愛楽園には〕『命ひたすら——療養五〇年史』（1989年）という、われわれ自治会で発行した記念誌があるんですけど。あれは、企画書をわたしが作った。裏面史をつくろうと。立派なこと、いいことばかりじゃなくて、ハンセン病の被害実態を明らかにするような本にしようということで企画書を作って、そのあと全患協本部へ行って、戻ってきたら、企画と違う本になってた。立派な本になってるなあと思って（笑）。それじゃダメだと。

〔いま〕被害実態を表したものを記録しとかないと、もうみんな高齢だし、残らないよと。誰もしゃべってくれる人〔がいなくなって〕、誰もわかんなくなってしまう。わたし自身もわかんないし、ということで。とにかく、聞き取りを、いま、しとかないといけないと、森川先生とかいろいろ相談して。とにかくやろうと。で、たくさんのボランティアの人たちに協力してもらって、聞き取り調査、園内に入ってもらう。それで、聞き取りはできたんだけど、じゃ、これ、だれがまとめるんだ。ボランティアではできないんで、専属を自治会で4名雇用して、それで作ったんですけどね。

沖縄県〔に対して〕、これは沖縄県がやらなくちゃいけない証言集〔なんだって〕。「みなさんが煽動して、無癩県運動とかやったし、それを記録する必要はありますよ」「みなさんの責任ですよ」ってということで、「経費を出しなさい」と。〔県が〕予算を付けるまでには、3年ぐらいかかりましたよ。いろいろ、県議会にも働きかけて。最初は、県も低い金額を提示してきたですよ。100万、200万ぐらい。「そういう話をわたしはしてるんじゃないよ」「4桁、出せ」ちって。〔しかも〕単年度ではできる話じゃないんで、人件費も含めた経費として、初年度が1000万で、翌年が1200万、計2200万円。〔そして〕編集委員に県の担当者も入れたのよ。「あんたらも参加しろ。お金を出してるんだから、人も参加しろ」って。そうしないと、訳わからん。名護市〔の担当者〕もメンバーに入れた。——〔いま、社会交流会館という名前の〕資料館をつくるための企画運営委員会を自治会は立ち上げているんですよ。そのメンバーにも、名



護市の課長を入れてる。「行政が入らんと困る」ということで。

『証言集』づくりのために専属で雇った人たちっていうのは] 市史編纂をやった人たちとか、吉川〔由紀〕さんなんかは、対馬丸とか沖縄戦のことをよく知ってる人だし、法律を知ってる人に森川さんに声をかけてもらったりして。

〔宮古南静園の自治会にも〕一緒にやろうよと〔声をかけました〕。そのときの会長は宮里光雄さん。「とにかく、一緒にやろう」と。「誰がやるんだ？」と言うから「ボランティアを頼め」。〔人形劇の活動をしてる〕「みやこ・あんなの会」に頼め、って。むこうからも〔愛楽園での〕編集会議に来てもらって、共同でやった。こちらからも、何度か〔南静園に〕行ったりもして。

『資料編』は、最初、つくる予定なかったんですよ。『証言集』だけつくりようということでやってたんですけど。ただ、証言が、実際にこれが事実だよという裏付けをどうするんだ、と。証言集に〔資料を〕載けると膨大な頁になるということで、じゃあ、別につくりよう。〔結局、『沖縄愛楽園編』と『宮古南静園編』と『資料編』の〕3冊になっちゃった(笑)。資料をあちこちから掻き集めるのに大変でしたよ。県の担当者とのこのロッカーの上に段ボール箱があると、「ちょっと、あれを見せて」つって。県の公文書館にも、ハンセン病関係あるんで、それをみんな開示しろ、と。

#### 青木恵哉, スコアブランド, 犀川一夫

『証言集』の編纂を踏まえて、愛楽園の成り立ちについて聞きたいですって? 青木恵哉さんは] 必要に迫られて、ここに土地を確保したんですね。〔昭和7年の〕嵐山事件とか、〔昭和10年の〕屋部(やぶ)の焼き討ちですね、そういったところで追い出されて、居るところがないということで、土地を確保して、ここに15名が移住してきた。拠点ができたくて、それからどんどん〔患者が〕ここに集まってくるようになった。昭和12年に沖縄MTLができて、建物ができていく。それができると、また、あちこちにいたたくさんの患者が集まってくるようになって、〔昭和〕13年に臨時国頭(くにがみ)愛楽園というのがスタートした。〔最初は〕「臨時」です。それから、本省の、厚生省の管轄になってくるという歴史ですね。

〔国の管轄になる前に〕MTLが、かなり募金〔活動を〕して、だいぶ、ここに〔資金を〕入れてますね。それで、木造の瓦葺きの建物がズラッと並んだというかっこうで、ある程度基礎ができるまでは、国からは〔予算を〕もらってないわけですよ。そういうことで、民間〔の力〕で作られた。そういう面では、他〔の国立療養所〕とは、若干違うのかなと。作られ方がですね。

だから、いまこちらに入所してる人も、退所してる人もそうなんですけど、「愛楽園があったから、いままで生きてるんだ」という言い方をする人たちも、けっこう、たくさんいるんです。「自分は強制収容じゃない」と。〔昭和〕13年、14年、15年頃入ってきた人たちは、「自主的に来たんだ」と言う人が、けっこういます。最初に入ってきた人たちですよ。

そのあと、戦争の足音が聞こえてきて、〔昭和〕16年、17年から強制収容が始まっている。〔戦後〕米軍も、日本軍と同じ強制収容を最初のうちはやった。

〔しかし、最初は〕民間医で来て、あとから軍医として来たスコアブランドという人が、ハワイのモロカイ〔島のカラウパパ療養所〕を知ってて、ハンセン病はそんなに怖い病気じゃない、と。アメリカではもう治る薬もできてるとい

うことで、焼け野原に〔なった愛楽園に〕資金を投入するとか、建物の材料を持ってくるとかっていうことをやった。

ですから、青木恵哉は〔愛楽園建設の〕前段で、後段はスコアブランドですね。〔ここでは、スコアブランド博士の悪口を言う人は〕まあ、いないですね。かなり、復興の手助けをしてる人ですから。食料から衣類からね。そういったことで〔スコアブランドの〕銅像も作ってる。

〔スコアブランド公園の「希望と自信の鐘」を下に降ろしたのは〕もう、撞けないんですよ。分銅がぶらさがってるところがヒビが入って。あれ、鋳物なんでね。折れて事故でもあったら悪いから、もう、叩くな、と。時報の代わりに鐘を叩いてたんですけども。いまは、チャイムに変えました。

琉球政府が法律（「ハンセン氏病予防法」）をつくるときには、〔愛楽園の自治会は〕宮古南静園〔の自治会〕と合同で文案をつくって、琉球政府にいろいろ要請はしてるんですね。

〔1972年の本土復帰後には沖縄も「らい予防法」になりましたが〕沖縄復帰特別措置法で、「ハンセン氏病予防法」の退所規定とか在宅治療の項が復帰後もそのまま継続されるようになったんで、べつに、そういうあれは変わらなかった。琉球政府からの流れがそのまま〔続けられるようにしたのは〕犀川〔一夫〕先生がやったことですね。これは残さんといかんということで。〔愛楽園にとって、犀川先生の存在は〕けっこう大きいですね。啓発も、あちこち行ってやってるし。そういったぶんでは、犀川先生の時代には、まだまだ新患がいましたんでね。わたしも含めてなんですけど。

〔厚生官僚だった大谷藤郎先生から「らい予防法」の廃止の話が出てきたときは〕もう、流れがそういう流れになってきてたんでね、べつに特段、びっくりするのではなく、当たり前前の結論が出たんかな、と。〔入所者のなかには、これは大変だと思ったひとも、けっこう〕いました。「予防法がなくなってしまったら、〔療養所から〕追い出される」とかですね。わたしは、「〔国は〕そういうことはしません」つって〔宥めました〕。「国には責任があるんだから、そういうことは許される話じゃない」と、〔園内に〕アナウンスしたんです。

〔そして1996年の予防法廃止で〕いろんな制約はなくなるんかなというふうに思ったんですけど、実際には、役人の態度をはじめとして、ぜんぜん変わらなかった。

### 建物の設計はお手の物

〔自治会長としての自慢話をひとくさり聞きたい、だって？〕自慢話なら、たくさんあるよ。わたしは設計事務所にいたから建築がわかるんですよ。〔ここの建物の建替えでは〕基本設計はみんなわたしがやってる。自治会事務所〔も〕そうだし、園内の〕スーパー〔も〕そうだし。そういったことでは、かなり、自治会としての意見を取り入れてもらってる。建物を見ると、ほかの園とはデザインが違うんじゃないですか。普通〔入所者の寮舎は〕長屋〔形式〕ですけど、もっと洒落たデザインにしると。

第一センターも、長屋〔形式〕じゃなくて、ユニット形式にした。〔建物内の〕ホール（ひろば）を取り囲むかたちで部屋を配置している。〔各室、ドアを〕開けると、すぐ職員の顔が見れるという状況になってる。

### 愛楽園は職員と入所者の関係が近い

〔今年の6月時点で愛楽園の入所者が213人。半年経って〕いまは202名。〔それに対して職員は〕みんなで330名ぐらい。〔よく、「入所者より職員のほうが多いじゃないか」と〕言われます。しかし、事務屋さんもおれば、いろんな現場もあって技能職の人たちもいたりして、〔330人の〕すべてが看護・介護に入ってるわけじゃない。介護員は〔正規雇用の〕定員と賃金〔職員〕合わせて200ぐらいですかね。いま、どんどん介護員が減らされて、〔そのぶん少しは〕看護師が増えてきている。〔それぞれが一定数いないと困る。〕見る部分が違いますからね。

〔沖縄愛楽園は、外の人たちの外来診療を引き受けてます。〕けっこう来てくれる。内科、外科、皮膚科、眼科、歯科、みんなやっています。入所者は予約制になってるんですよ。外来で来る人たちの診察時間帯は、入所者が終わったあとだから、トラブルは起きない。一般の人に混じって、たまに退所者も来ますね。

〔退所者の人たちも〕みんな〔よく〕遊びに来ます。沖縄は〔もともと〕入所者がほとんど県内の人なんです。他府県の人がほとんどいない。そういうことで〔入所者と退所者との親密感が強いのかなあと〕思ってますけどね。〔再入所のケースも最近では〕年に1人2人はあります。〔これから〕増えるでしょうね。みなさん、「動けなくなったら、園に行くよ」という話をしてるから。

〔いろいろな意味で〕本土の療養所と若干違うんです、愛楽園は。職員と入所者が気楽に一緒に飲み食いしてるし。ひじょうに関係が近いんです。一緒に遊ぶし。気楽に〔お互いに〕「おい、こら」ってやってる。もともと、地元の人ばかりだから。そういう気楽さというか、呑気さというか、そういうのがありますね。

### 集約化には集約化の仕方がある

〔園長とは、なんでも〕話できます。一緒に飲みもするし。山内和雄〔園長〕。沖縄〔愛楽園〕は、自治会と〔園長と〕の関係はうまくいってるのかな。〔第一センターを作るときには〕園長とあちこちの施設を見てきたんですよ。〔それは他のハンセン病療養所〕じゃなくて。ハンセン病療養所は、見ない。うちより、どうせ遅れてるから（笑）。ほかの民間の、新しい老人ホームとかを、沖縄本島の南のほうに行行って見てきた。

〔センターに集約化しようとする、なかには「これまで管理されてきたのに、もっと管理されるのは、おれは嫌だ」って言う人も出てきます。〕勘違いしてるんですよ。センターは、管理されない。自由です。みんな、車も持っているし。飲みに行こうと思ったら、名護の飲み屋街へ行けるし。べつに、管理はしてないですよ。まあ、心配で、「夜でも見てくれ。巡回してくれ」という人たちは、見るんですけど。「わたしは要りません」という人は、やらない。そういう取り決めにしてる。今年になってからも、〔旧来の〕寮舎（むこう）から3組か4組ぐらい第二センターに移ってる。その人たちは「〔センターに〕来て、よかった」って言ってるんです。なにも管理してるわけじゃない。自由にしてる。

〔東北新生園は、4階建てのメープルケアセンターを作ってますね。〕あれは、

自由がないですよ。だって、[地上] 4階とかの生活に慣れてないでしょう。からだは不自由になってきて、簡単に[出入りもできない]。それまで、平屋で、庭でいろんなものを育て、盆栽をいじっていた人たちが、いじれなくなってしまう。そういう人たちが、強制的にそういうところに上がらされると、おかしくなりゃあせんかなと思うんですけどね。

集約化には、集約化の仕方がある。べつに、上に伸ばす必要はない。面積はあるんだから、広く使えばいい。うちは、階層を重ねた建物は絶対ダメだよと言ってる。生活の場としてダメだよ、と。外に簡単に出ていけないという話になってしまう。

[医師の定員は、現状では] 充足されてないですね。定員 14 で、いまいるの 9 名かな。5 名欠ですね。[これでは] 足りないの、当直要員が琉大[の附属病院] から交替で来てる。アルバイトで。

[とにかく] 来る医者がない。公務員医者なんて[月給が] 安いから、来手(きて)がない。[それと最先端医療から] はずれてしまうんで、面白みがないんですよ。だから、[沖縄本島の] 北部地域[の名護市] に、北部[地区] 医師会[病院] と沖縄県立北部病院という 2 つ、基幹病院があつて、うちと 3 カ所で、ちょっと医師をプールしようという話など、いろいろ提案してる。うちの定員で雇って、むこうへも行く、両方診る。どうだ、という話をしてるんですけど、なかなか、のらないですね。[そもそも] 医師(ひと) がないんですよ。そういうかたちにしても。

いま、日本全体として医者不足。[でも] いるところにはいるんですよ。民間で、処遇のいいところ。公立はむづかしい。簡単に給料を決められんから。民間なら、勝手に決められるんですけど。ここから整形外科の先生が熊本の民間病院に移っていったんですけど、給与が年収で 800 万違うっていったかな。

「800 万か。止められないなあ」つって(笑)。「桁がちょっと違うなあ」つって。

### 看取りも自室で

[第一センターに入っているのは] 特重(とくじゅう)の人たち、視覚障害(もうじん)の人たちですね。あと、認知症(ちほう)の人たちが、最近は多くなってる。

うちは、第一病棟は閉鎖したんで、病棟はいまは治療センターだけ。病棟は急性期だけでやって、病気の慢性期になると、センターでフォローするようになってるんですよ。看取りも各自の部屋に戻してやってる。センターには、看護師もみんな二四時間、三交替で配置されてる。

[だから、他の療養所のように、具合が悪くなって病棟へ行ったら、行ったっきり、戻れなくなっちゃうなんていうことは] ないですね。いまはもう[社会的にも] それが普通になってるんじゃないですか。[病院ではなく] 家で死にたいというのが。本人の意向を聞いて、どうしたいかということも調査されてるんで、それに従ってやっている。[職員のほうの都合で、治療棟から自室に戻りたいというのを断るなんてことは] ここでは、させない。病棟で[仲間が] 誰もいないところで看取りをやるよりは、ちゃんと日常、世話をしているひとたちが看取ればいいんじゃないのかっていうこと。本人も、そう希望してるんで。まあ、そういうのをやっているのは、愛楽園(うち) ぐらいのもんだろうと思うんだけど。先週、厚労省の主催で介護員の研修があつて、瀬戸内[3

園]からも九州[の療養所]からも来てたのかな。みんなビックリしてた。「看取りまでやってる」って。「できるんですか」って。やる気の問題ですよ。

#### 認知症の人も閉じ込めない

いまのいちばんの課題は、やっぱり、認知症への対応ですね。高齢化してきて、認知症[の人が多くなり]被害妄想がだいぶ出てきたりして。大変ですよ、いろいろと。まあ、全国[の療養所に共通の課題]だと思っただけ。

〔徘徊の問題もありますけど〕うちは閉じ込めはしない。オープン。〔認知症の人が外へ行くときは、誰か職員が〕付いていく。大変ですよ。〔だけど〕大事。閉じ込めるのは簡単ですけどね。〔認知症の人たちだけの、特別な〕病棟に入れなくて、センターでフォローする。

うちは、認知症[の人]は第一センターの第2ユニット。そこも、外に面した部屋ですから、出ていこうと思えばすぐ出ていける。〔各部屋に〕出入り口がある。スロープが付いていて、バリアフリーだから、車椅子でも外へ、スラーと行けるようになってる。〔見つからなくてって、大騒ぎになったことって〕何度もあります。何度もあって、探したら、事故死してたこともあります。海が近いですからね。浜辺で倒れてるとか。そういう事故は、もう、しょうがないのかなと思ってますけどね。だからといって、括り付けるわけにもいかないし。〔徘徊のための事故は〕一般[社会]でも起こってることなんですね。〔対策としては〕徘徊の多い人たちの電動車椅子にセンサーを付けてる。どこに行ってるか位置がわかるように。

〔他の歩いて〕徘徊する人には、出入り口に感知マットとか置くだけけど。賢くなって、踏まないで飛んでいく。どないやっけて行くのか知らないだけだよ。踏まないんだよ(笑)。〔ここを〕踏んだら〔職員が〕出てくるちゅうのがわかるのかどうか知らんけど。なんで鳴らなかつたんだちゅうのがあったりしますね。賢いなあと思って(笑)。こっちは、絶対踏むはずだけど、と思っただけね。

#### 沖縄愛楽園の将来構想

〔愛楽園の〕将来構想[の案]は、名護市と一緒にあって作りました。新しく作っている建物もそうなんですけど、いまある建物は〔いずれ〕福祉施設に転用していこうという[のが骨子]。あらたにホスピスを作ろうという提案も、医師会からあって、「医師会がやるなら、どうぞ」と言っただけど、やる気ないみたいで、それはダメになった。

〔園内の建物は〕若干手を加えれば、老人ホームとかにすぐ転用できるようになってる。まあ、それは〔わたしたち入所者が亡くなって〕空かないと使えないんですけどね。いちおう、そういう展望はもってます。あとは、〔愛楽園〕発祥の地のところを、将来的に海浜公園化しよう。市民が憩えるところとして、ここを残すために。で、ここに、いま、社会交流会館[という名前の]資料館を作っているんですよ。もう、建物はできました。そのエリアは、将来的にも残してくということで、いま、工事を着々としています。

〔わたしたちは各療養所に「資料館」を作りたいんだけど、国は〕「資料館は〔すでに〕国立ハンセン病資料館が多磨全生園にあるから〔これ以上〕要らないでしょう。〔資料館では〕予算請求はできません」と言うので、まあ、「社会



交流会館」〔という名目で予算請求してる〕。わたしらは、予算くれれば、なんでもいいよ、って<sup>4</sup>。

〔そこに隣接した住吉区も〕いまは一般舎なんですけど、第二センターをユニット化して、ここに移そうと〔計画している〕。ユニットのいちばんのいいところは、夜間帯のナースコールが減ったということですよ。第一センターが長屋〔形式〕のときは、ナースコールが一日 70～80 回もあったんですけど。ユニット化したら、ほとんどナースコールが鳴らなくなった。いつでも顔が見えて、対応できるようになってるんで〔安心なんだね〕。

### カジマヤーの祝い

〔わたしがここに入所してから、石垣の母がここに〕面会には来ないけど、わたしがしょっちゅう〔会いに〕行ってるんです。おふくろが那覇まで出てくるから、わたしが那覇に遊びに行く。〔石垣島にも〕今年の夏に帰りましたよ。ちょっとお祝いがあったんで。カジマヤーっていう、97 歳の〔祝い〕。カジマヤーって、風で回る車、風車（かざぐるま）だね。子どもに戻るといって、風車。〔きょうだいだけでなしに〕親戚も集まって。親戚はみんな、わたしがこっちにいることを知ってるし。ぜんぶオープンにしてるから。同級生もみんな知ってますよ。〔わたしに対する変な反応は〕なにもないですね。高校の同期会とかも行きますんで。べつに隠すあれじゃない。最初から隠してないから、わたし。

<sup>4</sup> 福岡が次に沖縄愛楽園を訪ねたのは、2016年6月30日であった。このときは、ハンセン病家族訴訟弁護団による、7月1日から3日の、家族原告たち相手の聴き取り調査に参加するために訪沖し、愛楽園に前泊したのだ。

「夕方、浜を散歩していたら、バーベキューの準備をしている人たちがいた。誘われたので仲間に入れてもらう。なんでも、4月中旬からの2カ月半、交流会館オープン周年記念で、金城実さんの彫刻と森口豁さんの写真の、二人展をやってきたの打ち上げとのこと。辻央という若い学芸員の話だと、二人展の期間に1,280名余の来館者があったそうだ。自治会長の金城雅春さんは『交流会館は人権と平和の展示を続けていく』と挨拶。交流会館の活用の仕方としては、愛楽園がいちばんうまくいっているかも。／今日集まったのは24、5人だったけど、ギター演奏あり、弾き語りあり、踊りありで、ああ、これは長続きする運動の作り方だな、と思う。目立つひとでは、『人形劇団かじまやあ』代表の桑江純子さん。ギターで歌っていたのはユタカという人で、バーをやってるみたい。でも、高齢者中心なのは、いづこも同じだ（フィールドノートから）。

2013年の聞き取りでは、他の国立ハンセン病療養所と同様、「社会交流会館」という言い方をしていたが、実際に2015年にオープンしたのは「沖縄愛楽園交流会館」であった。金城雅春のなかで、すでに、愛楽園は「外の社会と隔絶された空間」ではなく、「社会の中に地歩を占めている存在」であったのだろう。ゆえに、「社会〔との〕交流〔を進める〕会館」という名称はミスマッチであり、端的に「交流〔を深める〕会館」との表現を選ばれたのであろう。

金城雅春が死の直前まで精力的に取り組んでいたのは、愛楽園のある屋我地島内の近隣の集落の住民との対話を深めることであった。金城会長を訪ねて頻繁に愛楽園の自治会室を訪れるようになっていたある近隣住民は、「自分たちも「屋我地」に住んでいるということで、より外の人間から、おまえたちもハンセン氏病の患者かとのまなざしを受けることがたびたびあり、苦しかった」と語ったという。いまやっと、ほんものの対話が始まろうとするときに、金城雅春は逝ってしまった。ご冥福を祈る。

## **The Death of an Outstanding Leader of the Residents’ Council at a Hansen’s Disease Sanatorium: An Interview with Masaharu Kinjo at Okinawa Airakuen**

Yasunori FUKUOKA and Ai KUROSAKA

On Monday, March 8, 2021, an obituary arrived from Mr. Akira Tsuji, a curator of the Social Interaction Hall of National Sanatorium Okinawa Airakuen. Mr. Masaharu Kinjo, the chairperson of the residents’ council at Airakuen, passed away that morning. He was 67 years old. Mr. Tsuji said he was quite surprised by Mr. Kinjo’s sudden death because he visited the residents’ council office even last Friday. Due to the COVID-19 situation, only the family of the deceased, some executive members of Airakuen and the residents’ council could attend the funeral held at the mortuary in Airakuen. Someday a memorial meeting for Mr. Kinjo is supposed to be held.

To commemorate Mr. Masaharu Kinjo, we have put together his narratives collected in the interviews that were conducted on both the 14th and 15th of December, 2013. Unlike the other usual life stories, this time we would like to start from introducing the contents of the field notes that we took during the survey trip.

Since Mr. Kinjo was one of the last generations who suffered from Hansen’s disease in Okinawa, his life story revealed the vivid aspects of Hansen’s disease problems in Okinawa after 1970s which are different from the cases of mainland Japan. At that time in Okinawa, the patients were able to get outpatient care, instead of quarantine. Nevertheless, the impact of the Segregation Policy had disturbed the cured patients of Hansen’s disease to live with peace of mind in their home community.

We heard many stories of the heroic and outstanding leadership of Mr. Kinjo as the residents’ council chairperson and he never boasted about his achievements of fighting at the national compensation lawsuit or compiling *The Testimony Collections of Hansen’s Disease in Okinawa*.

As the residents in Airakuen were super-aged, their space for daily lives became consolidated at the care centers. Mr. Kinjo said, “There is good consolidation and bad consolidation. The knowhow to manage the consolidation makes a difference.” This sharp insight reveals his excellent leadership. He set up an environment for palliative care at the familiar private rooms, not at the lonely hospital ward. He also had a policy not to impound people with dementia. He maintained his own philosophy for the ex-patients in the sanatorium. No one can wipe out the memory of such a person.

**Keywords:** Hansen’s disease, Segregation Policy, Leprosy Prevention Law, life story